

# 不変と革新

～長寿経営に向けて～

事業をつなく

菊川工業（東京都墨田区、宇津野隆元社長）は、東京スカイツリーや英ロンドンのブルームバーグ新欧州ビルなど、常に時代をリードする建築物の金属工事を手がけてきた。顧客の要望に合わせてオーダーメイドで製作するスタイルには、困難な課題がつきものだが、『Never Say No』の技術的な精神で克服してきた。

菊川工業は元々鍛冶屋としてスタートした。1950年ごろから竹中工務店東京支店の知遇を受け、業務を拡大していく。南極・昭

菊川工業（東京都墨田区）

## 唯一無二の建築金物加工

和基地や東京タワー、日本武道館、大阪万博のソ連館などの工事へ参画していくうちに、ゼネコン関係者間で認知度を高めていく。時は流れてバブル期。シンボリックな建物を建てようというさまざまな分野での需要をうまく捉え、シンボルタワーのチタン外装や放送局の球体外装など、唯一無二の建築金物を次々と作っていった。

しかし、その流れはバブル崩壊とともに終わり、菊川工業の新規受注は急減し、どん底を味わう。その際、当時の宇津野嘉彦専務（現会長）が「粗利を意識しながら利益確保を設計に落とし込む」（宇津野社長）という経営を一層強化。社員一人ひとりが利益を意識した結果、かつてとは違う企業に変わっていったという。

好機が訪れたのは2000年代に入ってから。外資系の大手IT企業から店舗ディスプレイの受注が舞い込み、長年培ってきたオーダーメイドの対応力を武器に「日本で作るのが難しい仕様ながらサンプル数百種類作った」（同）。その努力が報われて採用され、その海外にも販路を拡大して今に至る。

10年後の33年には創業100周年を迎える。これからは「受注型の仕事だけでなく提案型の製品展開も」（同）と新たなステージを意識している。

鍛冶屋としてスタートした菊川工業。常に時代をリードする建築物の金属工事を手がけてきた（1962年当時の社員）



【企業メモ】1933年（昭8）に現社長の祖父・宇津野和彦氏が立ち上げた。宅地化の波を受け、70年にオーダー金属建材の工場を現本社の場所から千葉県白井市に移した。22年12月期の売上高は約50億円。